

クラシック界の 2020 年問題を乗り切るためのヒント

オーケストラにも 2020 年問題というのがあるらしい。2020 年問題とは、東京オリンピックが開催される 2020 年までは、建築や不動産などの業界でそれなりに景気がよいが、オリンピックが終われば一挙に不景気になるのではないかという恐れを表した言葉だ。2020 年代には人口の高齢化がますます進んで、社会のさまざまな面で困難さがあらわになるのではないかと、という漠然とした不安感も含んでいる。音楽評論家の片山杜秀氏のコラム「クラシック界の未来」（日本経済新聞 2 月 11 日朝刊）によれば、クラシック音楽関係者にも同じような不安があるそうだ。オリンピックまでは文化芸術に対して国、県、市役所などからの財政援助が続けられるかもしれないが、オリンピック後はそれが大きく削減されるかもしれないというのである。これまでも、橋下徹氏が大阪府知事や大阪市長の時代に大阪のオーケストラへの補助金を大幅にカットした例があるが、2021 年以降は、多くの自治体で、社会福祉費用の増大などのために、文化予算が減額される可能性がある。不景気になれば、企業からのメセナ（文化芸術への援助）も減るであろう。

プロのオーケストラの維持にはお金がかかる。1 回の演奏会で、演奏するオーケストラの団員は約 100 人であるのに対して、聴衆は、大きな演奏会場が満員になったとしてもせいぜい 2 千人である。聴衆 20 人のチケット代で演奏者 1 人の出演料をまかなう計算になるが、実際は、会場費や楽器の運搬費、プログラムの印刷代、練習場の家賃、裏方スタッフの費用など諸々の経費がかかるので、演奏者の取り分は極めて少なくなる。しかも、毎回の演奏会で聴衆受けする有名な曲ばかりをやるわけにはいかないの、演奏会場に空席が出ることも覚悟しなければならない。うまくいけば数人の演奏者で武道館を満員にできるようなロックやポップミュージックのコンサートに比べて、クラシック・オーケストラの演奏会は構造的に財政が苦しいのである。だから、かつてのヨーロッパでは王侯貴族、現代では、国や自治体、企業がオーケストラの財政援助をしてきた。その援助が不安視されるのが「2020 年問題」なのだ。

2020 年代には、オーケストラにとって別の危機もある。AI（人工知能）の進化である。昨年、東京芸術大学で、弦楽器奏者 4 人と AI を組み込んだ自動ピアノによるシューベルトのピアノ五重奏曲「鱒」の共演があった。AI ピアノは、マイクで 4 人の音やリズムを聴き、カメラで奏者の腕の動きを察知して、音を出すタイミングを測り、多少のテンポのズレなどはあったが共演を成し遂げた。しかも、この AI ピアノには、20 世紀のピアノの巨匠スヴェトスラフ・リヒテル（1915～97 年）の演奏データが搭載されていた。つまり、観客は、生きている演奏家とすでに死去した演奏家の共演という、今まであり得なかった演奏を聴いた。まさに、この演奏会の主催者が言

うところの「時空を超えた初共演」であった（この演奏の一部は、ヤマハ株式会社によってネットで公開されている）。

ピアノ以外の楽器もすべて AI ロボットになり、楽器奏者すべてがロボットというオーケストラが舞台に登場するのはまだ先のことだろうが、クラシック音楽の膨大な録音データと AI 技術を活用して、これまであり得なかった音楽世界を実現することは、すぐにでも可能であろう。例えば、1990 年に死去したレナード・バーンスタインが武満徹の 1990 年以降の作品を現在の NHK 交響楽団を指揮して演奏したら、どのようなサウンドになるのか。あるいは、世界一流の奏者や歌手を、故人も含めて集め、架空のオーケストラと合唱団を結成し、ベートーベンの第九交響曲を演奏したらどうなるか。こうした夢の組み合わせを実現した音楽 CD の販売やネット配信がされるのは、それほど先のことではないだろう。そのような時代に、生身の生きている人間によるオーケストラの演奏は、何をめざすのだろうか？

プロのオーケストラにとっての危機の時代の到来とは裏腹に、アマチュア・オーケストラの数はどんどん増えているのではないかと思う。それは、戦後、日本が豊かになるにつれ、楽器演奏をやる人が増え、学生オーケストラの数も増えていき、その人たちが卒業後、社会人オーケストラを結成し、そうでない場合も定年後に楽器演奏を再開し、アマチュア・オーケストラに所属して余生を楽しむ人が増えてきたからだ。ところが、アマチュア・オーケストラの数が増えても、プロのオーケストラの危機の解消には繋がらないであろう。なぜなら、アマチュア演奏家たちは、聴くことより弾くことが好きだからだ。自分たちの演奏会の開催には熱心だが、プロのオーケストラの演奏会に足繁く通うわけではない。

先日、私の大学時代のオーケストラの仲間 6 人が東京で集まって飲む機会があった。6 人中 5 人が様々なアマチュアのオーケストラに所属していた。なかには、「やっとかめ室内管弦楽団」という名のオーケストラもある。「やっとかめ」は名古屋弁で「お久しぶり」の意味で、これは東京在住の名古屋出身者がメンバーのオーケストラである。

その飲み会で大いに盛り上がった話題が、われわれの学生時代の名古屋大学交響楽団第 35 回定期演奏会（1978 年春）の練習と本番の指揮をお願いした指揮者についてであった。この演奏会のメインプログラムは、本日と同じブラームスの交響曲第 4 番であった。

その指揮者とは、宇宿允人（うすき・まさと）氏である。宇宿氏は、もとはNHK交響楽団の首席トロンボーン奏者であったが、その後、指揮者に転向。朝比奈隆氏のもとで大阪フィルの専属指揮者を務めた後、ヴィエール・フィルハーモニック（現在の関西フィルの前身）を自ら結成した。名大オケが宇宿氏を招へいたのはこの時代である。

宇宿氏の練習は、とにかくすさまじかった。名大オケの学生たちに、容赦ない怒りの声を浴びせ続けた。彼は、特に、技量があるが淡々と弾くタイプの演奏者を攻撃した。例えば、クラリネットに名手がいたが、そのスマートな演奏が気に入らなかったのだろう、演奏をさえぎり、皆の前で同じフレーズを何度も何度もしつように練習させた。また、演奏中に突然、ティンパニー奏者に向かって指揮棒を投げつけ、「感情を込めろ」と怒鳴った。正しいリズムだがあっさりとした打ち方に腹を立てたのだ。

宇宿氏がもう一つ嫌ったのは、インテンポ（譜面どおりの正確な拍子）だった。特に曲の出だしである。彼は、指揮者が棒を振り下ろした瞬間にオーケストラが演奏を始めるのを嫌った。「ためろ」「一拍目は音を出すな」「天井が落ちてくるまで待て」と怒った、しかし、これは演奏する側にとっては難題である。自分だけ飛び出たはいけないし、遅くなってもいけない。頼りになるのは指揮棒なのに、それに合わせて音を出すと怒られる。ひとりひとりが五感を研ぎ澄まし、オーケストラ全体の雰囲気を感じ取って音を出さなければならない。極度の緊張と集中を強いられるのである。

さて、演奏会当日、リハーサルが始まる前に、コンサートマスターのT君が指揮者の部屋に呼ばれた。彼はまた怒られるものと思って覚悟した。というのは、前日の豊田講堂でのゲネプロ（通し稽古）で、宇宿氏と楽団員との間が険悪なムードになり、挙げ句の果てに宇宿氏が「帰る」と言って豊田講堂を飛び出し、楽団員の一人があわてて連れ戻したという事件があったからだ。ところが、T君が恐る恐る指揮者控え室を訪ねてみると、宇宿氏は、団員が舞台挨拶で立ったり座ったりするタイミングを指示しただけだった。T君は拍子抜けするとともに、宇宿氏がこれまで怒ってきたのも、「帰る」といってゲネプロを飛び出したのもすべてポーズだったのだと急に理解したと言う。

宇宿氏はエキセントリックな言動をしたが、彼の音楽は奇をてらったものではなかった。T君は述懐する。「あれから40年近くがたった今になって思えば、宇宿さんの音楽は、オーソドックスで音楽性豊かなものだった。宇宿さんからの指示を書き込んだ楽譜が残っており、それを見てもそう思う。」

宇宿氏は、演奏者に音楽に対して極限までの熱意をもつことを要求した。それは、正しい音程やリズムへの要求とは別次元である。正しい音程やリズムは、機械によって達成可能であるが、熱意はAIによっては生まれえない。しかも熱意は、その場にいる人にも特別な感動をもたらす。おそらく、CDで聴くのと演奏会場で聴く感動の

違いを最も表現できた指揮者が宇宿允人であったのかもしれない。そして、そこにクラシック界の 2020 年問題を乗り切るためのヒントが隠されているかもしれない。

宇宿氏はその後、東京に活動の場を移し、評論家の西部邁（にしべ・すすむ）氏のような熱烈なファンを得て「宇宿允人の世界」という連続演奏会を 200 回近く開催し、2011 年に死去した。

（[名古屋大学交響楽団第 114 回定期演奏会パンフレット](#)）